

青春時代のすべてをさらした 「地獄の戦場」から帰還して

元山俊美

本町三丁目

出会い

「あの出会いが私の人生をかえた」ということはそう珍しいことではない。私の「地獄の衡陽戦」は、教育勅語で育った元山俊美という人間の「戦争の現実」との出会いであった。それは、熾烈な出会いであった。二度と経験したくない出会いであり、また、させてはならない出会いであった。そして戦争とは何かを考え、「新たな出発」を考えさせる出会いでもあった。

これらの出会い、そして青春時代のすべてを戦場にさらした私が日本の土を踏んで、その生き方、働き方に大きな影響を与えたことはいままでもない。

極寒零下三七度、無情な非常呼集。満期帰国の夢も吹き飛ぶ

ところは満州（現中国）ハルビン郊外、寒風に震える鉄道第三連隊の兵舎、時に昭和十九年（一九四四年）二月二十八日午前三時であった。不寝番の立つ廊下の電球はいつものうす暗い光りを流していた。窓際のベッドに眠っていた私は、かすかに感じたラッパの音にハッと目をさました。極寒零下三七度、二重

造りの窓ガラスは、氷の結晶が織りなす絵模様でキラキラ光っていた。外に流れるラッパの音は紛れもない非常呼集のラッパであった。私は瞬間「これだったのか」と直感、「なに！これで死んでたまるか！」と抗議にも似た怒りが頭の中をよぎって行った。というのは、私はすでに一か月以上、帰国の日を今か今かと待っていたのだ。正確には、一月二〇日をもって三年間の長い兵役の義務を終え、つまり満期除隊の身であったのである。繰り返しながら響き渡るラッパの音、凍てつく空気を震わせながら大地に突き刺さるような、それは無情とも非常とも響くらッパの音であった。

この非常呼集は、「一号作戦」による動員であった。昭和十九年（一九四四年）一月二四日、大本営は「大陸命第九二一―号」をもって、「支那派遣軍総司令官は、湘桂、粵漢および南部京漢鉄道沿線の要域を攻略すべし」という作戦命令を発していた。

この作戦は「湘桂作戦」ともい、攻略都市は中国の湖南省の長沙、衡陽、桂林。なかでも衡陽は東西南北の鉄道の重要拠点

であった。これに動員された日本軍十三個師団三六万二千。中国軍二〇個師団五五万の大軍で、まさに「大陸命」を賭けた大決戦であった。私は、そんなことを知る由もなく、鉄道第三連隊の主力が、その作戦の方面軍司令官の直轄部隊に編入され、私もその中の一員に投入されたわけである。この戦闘は戦史上、また侵略戦争中最大の凄惨な死闘を繰り返し、「地獄の衡陽戦」といわれた。

衡陽へ延々三千五百キロ、自ら命を絶つ兵隊

三月二日、ハルピンを出発。南京からは行軍であった。武昌そして洞庭湖のほとり岳州（現岳陽）からいよいよ戦場の真つ只中へ。その距離延々三千五百キロ。六月に入ってから連日の雨。平地は泥海となって溢れ、山は水でゆるみ、重い背囊（はいぶくろ）を背負い膝まで埋まる赤土の道なき道、わずかでも斜面にかかると一歩あるいて半歩すべって戻る難渋が続く。加えて空からは米軍機の襲撃である。兵の中には、苦痛に耐えかね自らの銃で命を絶つものが現われるようになった。軍馬でさえも馬上の手綱（てなごう）に後脚で立ち上がり、嘶（いなな）きながら激しく抵抗する。私はこの時、ふと立ち止まり、後方に続く隊列を見渡しながら、この隊列の中にいる自分を考えつくづく思った。いつ故郷へ帰れるだろうか。馬よりも黙って歩いている兵士は何を考えているのだろうか。

隠密行動で先行潜入。水の臭い

鉄道部隊は鉄道の確保と運営、建設あるいは破壊である。したがって第一戦の攻撃部隊には支援され、時には先行潜入して施設の確保に当たる。私が衡陽駅に先行潜入せよとの命令を受けたのは、六月二七日の夜半十一時頃のことであった。たしか七人だったと思う。辺りは真つ暗闇。合い言葉は「山と川」。帯剣を布で巻く。状況は全く不明。全神経を張りつめ、息を殺しての前進であった。喉の渇きも激しい。山間の切り割りの道らしき所に入った時、不思議にも水の臭いを感じた。直感的に、これは飲める水だ、動物的本能というのか。手にした銃を背中に、ゴロゴロした岩肌に体ごとくっつけ、ヤモリのように手探る。チョロチョロと伝わって流れ落ちる水だ。掌で水を受け、口をくっ付けて啜るようにして飲む。ときどき口の中に土塊（つちこ）が入るのでぶつぶつと吐き出す。さらに片手では水筒の口で水を探り、水筒に補給した。今もこの時のことがはっきり臉に浮かぶ。そこから出たときであった。銃砲撃の音が聞こえ、赤く焼けている上空が見えた。そして、それが段々と激しく間近になってきた。こうして衡陽の北側郊外を流れている来河の鉄橋河畔についたのは、五時間後の六月二八日午前四時ごろのことであった。

肉体がはじける肉弾戦、地獄の衡陽戦から帰還して

これまで幾度か戦争映画での戦闘の凄まじさは見ていた。しかし私が、「いかなる映画製作の技術をもってしても戦争の凄惨

さを実現することは絶対できない」と実感したのはこの時である。

大地を揺るがす銃砲撃弾の発射音と砲爆弾の炸裂、走る閃光その撃ち合いは一秒も止むことなく、はらわたを抉り^{えぐ}硝煙天空を覆う。限界なき破壊の強行、その無差別性と規模の大きいこと。中国特有の塔の真ん中に砲弾が命中し、折れて燃えながら崩れおちて行く。私が潜入する所はその真つ直中なのである。私は緊張した。しかしそのうち本隊と合流し、頭上の銃弾を潜りながら硝煙の東衡陽に入った。駅構内の伝票が真新しい当日付けであった。思わず辺りに銃を構え眼をくばった。貨車の中で小奇麗な伝票？ 実はこれまた新しいドル紙幣であった。硝煙の戦場ではなんの役に立つものでもない。精々たばこの火付け用くらいのものであった。

私が衝撃を感じたのは、湘江の河岸の壕で対岸の戦闘状況を記録する任務についたときである。V型の観測鏡をのぞくと、対岸斜面の陣地「学校の高地」で日本軍兵士が中国軍の前面の至近距離で睨み合い、迫っているのが手にとるように見える。私はここで、また再現不可能な戦争の現実を見た。肉弾戦という言葉がある。しかしその真実を語る者はいないということである。目の前でみるその肉弾戦は、「肉弾」が絶叫し、無惨にもはじめて消えていくのである。その凄惨な末路、これが遙々^{はるばる}海越え山越えて、難行苦行、ここまで来た若者への報酬なのか。

そのあまりの惨さに私は息を飲んだ。私はそのとき腹の底から感じたことは、「肉弾戦の真実を語る資格のあるのは、肉弾戦で散った兵士以外には断じてない」ということであった。

当時は太平洋の戦況が作戦の鍵であったため、地獄の衡陽といっても知らない者が多い。衡陽における戦闘の凄まじさは、既に述べたように双方百万の大軍の激突であった。それが激烈であり接近戦であったことは、部隊長はもちろん師団長や参謀長などが白兵戦で戦死していることをみても分かる。彼我とも大変な死傷者が出たが、救出することができず放置の状態であった。負傷した者は哀れであった。野戦病院といっても土間にアンペラを敷いただけである。屋根があつて壁があれば良い方で、昼は炎天、ハエ、夜は蚊に悩まされ、葉がないから治療もできない。消毒できない傷口は腐る。そこにハエがたかつてウジがわき、傷口深く潜って肉をつつく。自分の手も足も動かすことができないから、衛生兵が来てピンセットでとってくれらるまで地獄の苦しみだ。ウジをピンセットで抜き取る、これが唯一の手当であり治療なのである。衡陽の攻略戦は四十余日間にもわたる死闘のあげく八月八日終息した。その二、三日あと私は西衡陽駅付近の空地で、土に少し埋まっている編上靴^{へんじょうか}(軍靴)を見付けた。これはと思い拾いあげようとしたが抜けない。こゝろは手に力を入れ抜き取ろうとしたら靴の中には未だ足が入っていたのである。寒気が背筋を走った。私は当然、この兵士

の名前は？ 部隊は？ 連絡は？ が頭を走る。そして思ったのは、ここに放置同然にされ腐乱しているこの兵士の故郷では、「名譽の戦死」として伝えられ、この実態は永遠に闇から闇へ葬り去られるであろうことに、私は言い知れぬ酷さ、無念さと哀れさを覚え、腹立たしさがこみ上げてきた。

私は五年五か月の地獄の戦場から帰還し、日本の土を踏むことができた。そして日本国憲法に出会った。私はその憲法を読みながら、この憲法は嘘いつわりもない、私のその地獄の戦場そのものの中から生まれたものだと思えた。それは私が戦場で、いつもこの世から戦争という字がなくなればよいと思っていたからである。

『日本国民は：政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないようにすることを決意し：われらは全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する』

私は本当によくぞ言ってくれましたという実感で感動したのである。あれから半世紀も経った今、自分の人生を変えた「戦場の出会い」を振り返り、その体験を通してそれに相応しい歩みを果たして歩んだであろうか、そして少しでも報いたであろうかと、つくづく考える今日このごろである。

